



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1980 精道教育促進協会(音屋)三・三四五二芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

「なれかしの力」

「神よ、私は御身のみ旨を果すためにきた。(ヘブライ10・7参照) 私は主のはしためです。(ルカ1・38)」

右の引用は、「みことば」が世においていなるときの言葉と、聖マリアが主についてのお告げを受けたときの返事です。(…)「みことばは人となり給いて…」の瞬間を思うと、心はよろこびにふるえるのではないのでしょうか。(…)マリアは天使の知らせを受け容れます。聖ルカの描写はたいそう簡潔ですが、旧約聖書の内容が豊富に含まれており、キリスト教の啓示の新しいさをはつきりと示してくれま

す。主人公は最初の、しかも欠くことのできない救いの計画の協力者、女性のなかの女性なのです。この女性はイザヤが預言した(イザヤ7・14)「アルマ」、つまり王家の血筋をひく未婚の乙女、ガリレアの寒村ナザレトに住むマリアでした。ギリシャやローマ文化の影響下にあるユダヤ人の考え方によれば思いもよらないほど、高い誉れを受ける女性、これこそキリスト教の新しいさですが、それは、大天使

聖ガブリエルが神のみ名においてマリアにお告げを知らせるときから始まりました。マリアはアヴェ(めでたし)という大変なことはであいさつを受け、驚いてしまいます。世のはじまり以来はじめて救い主についての知らせが告げられたのです。「聖寵みちみてる」方。このことばには、永遠より神に選ばれて光り輝く、無原罪のマリアがみえます。「主御身と共にまします」。神はマリアと共においでになる。人々のなかから選ばれ、エンマヌエル(神共にいます)の母となるべきマリア。これからは神がつねに私たちと共にいてください。人々を救うため、救い主である御ひとり子を与えるために人間となつてくださったのです。そしてマリアは、この救い主の現存の生き証人、保証なのです。

エズスと名づけなさい。それは偉大な方で、いと高きものの子と言われます。また、その子は主なる神によって父ダヴィドの王座を与えられ、永遠にヤコブの家を治め、その国は終わることがない。(…)聖霊があなたに降り、いと高きものの力の影があなたをおおうのです。ですから、生まれるみ子は聖なるお方で、神の子と言われます。(ルカ1・31・35参照)

天使は、「みことば」がこの世に来られてもよいかと同意を求めます。何世紀にもわたる期待がこの瞬間に集中します。人間の救いはこの瞬間にかかっています。聖ペルナルドはお告げについてすばらしい言葉を残してくれました。「全世界があなたの足元にひざまづいて待っています。それも当然のこと、しいたげられた者の慰め、とられ人の解き放し、死に定められた者の解放、つまりアダムの子供すべての救いは、あなたの一言にかかっているのです。おん母よ、急いでお答えください。」

父たちが考えているのは正当である。教会憲章(56)

聖母へのお告げを考えると、マリアの生き生きとした行動的な信仰をまねるべきことがわかります。神のみことばを受け入れ、何であれ神のみ旨に従う寛大で物おししめない信仰、いかなる困難も無理解も危険も物ともせず克服するほどの信仰、愛の火につつまれたような生き生きとして、神のご計画に積極的に協力する行動的信仰、これがマリアの信仰なのです。「われは主のはしためなり」。公会議の教えによれば、私たちもマリアのように信仰と従順の心で、このような返事をして、それぞれが自分の与えられた分野で神の王国のために協力しなければなりません。

神のみ旨を果す

マリアの返事は「みことば」の、御父への返事と同じです。マリアの返事は、その返事の瞬間に人の子となられる神の御子の返事があったからこそ可能になりました。本日の祝日はご託身の一番大切な奥義を祝うためです。ヘブライ人への書簡を読むと、「みことば」の想像もできぬほどのへりくだり、人々のために十字架上の死までいとわぬ神の御子の謙遜が深く理解できるような気がします。「キリストは世にはいるときいわれた、『あなたはいけにえも供え物も望まれません、ただ私のために体を準備された。あなたはやくつくす犠牲と罪のための犠牲とを喜ばれなかつた。そこで私は、私について巻物に書きしるされてあるとおり、神よ、私はあなたのみ旨をおこなうために来る。』といった。』(ヘブライ10・5)

私たちが人間を思って用意された御体と今日の祝日は、九ヵ月あとのクリスマスに思いを巡らせています。しかし、それだけではなく、初代の信者たちがつかんだ大層深い意味を教えてください。お告げは、イエズスのご受難とご死去と復活を示してい

るからです。聖母へのお告げは四旬節中に祝われます。そこで、お告げには救いに関係のある意味が含まれていることがわかります。ご託身は、イエズスが御血を流して成就される十字架上の贖いと深い関係をもっています。「神よ、私は御身のみ旨を果すためにきた」なせ、これほど従順で謙遜、なせこれほどの苦しみを忍ばれるのでしょうか。答えは使徒信経にあります。「生ける人と死せる人とを裁かんとす」と。イエズスは天から下って、人間が天に昇ることのできるよう、また、人間が失った尊さを取りもどすことのできるようにして下さったのです。イエズスは、契約を完結させるためにになりました。ご託身のおかげで、人間は特別にすばらしい尊厳を与えられたのです。教会が進む道もここに出発点があります。私は最初の回勅「人

マリア様へのお願い

普段はお互いに別々に生活していますが、今日は、聖母のかたわらで、家族の集いにかけた兄弟のようにみんな一緒に、聖母に祈りましょう。折々に母親の周囲に家族が集うようなときには、兄弟たちがみな、親切と仲なおりと一致に心をくだき、兄弟としての愛を示そうとするのではありませんか。その上こういう時には、親孝行から、しめくくりの言葉は母親にゆずるものです。そして、母親の心から愛情がほとばしり出るときでもありません。

今はそのときです。優しい聖母は、キリストの神秘体の一員である子供たちが皆、互いに心を尽すよう絶えず招いておられます。今、この時にあたって、長子としての私は、きつ

類の救い主」にかきました。「主キリストは公会議が教えているように、神の御子が、その託身によって、ある意味ですべての人間と結合したとき、とくにその道を示されました。それで教会は、その結合がたえず実現され、新たにされるようにすることを自己の根本的な使命と認めています。実際教会が実現したいと望んでいるのは、この一事です。すなわち、キリストが、託身とあがないの秘義に含まれている人間と世界に関する真理の力と、この真理から輝き出る愛の力をもって、ひとりひとりの人間とともに、人生の旅路を辿ることができるよう、すべての人から見いだされることです。」(里脇枢機卿訳より)

「みことば」が人間の救いのため、人間の尊厳回復のためにご自分を御父に捧げられたことを教会が忘れることはあり得ません。主がご自分をお捧げになったことに、救い主の使命全体が含まれています。「正義の太陽」がその方を受け入れなかった闇の世界におはいることになるのなかに、なにかもが含まれているのです。そして、聖ヨハネ福音史家は教えています。「かれをうけいれた人々には、みな、神の子となれる能力をさすけた」(ヨハネ1・12)(…)

よろこんで受けいれようではありませんか。暗闇はいつも勢力を広げようとしています。心のよこしまな金持、他人の苦しみに無関心な人々、相互の不信、国と国との対立、理性を暗くし、人間の尊さを低める快樂主義など、神への侮辱つまり罪はすべて、隣人愛にもとる行為なのです。無数の悪い模範のなかにおいて、私たちは神への忠実を示さねばなりません。値うちのないたくさんのものに囲まれている私たちではありませんが、悪にうちかつことのできる善のぬちを示す人間になる必要があるので。キリストの十字架は私たちの力となり、マリアの従順は私たちの模範であります。信仰を恥ずかしく思わないことになりましょう。私たちは世界を照らす星、人々をひきつける光、人々を納得させる暖かさとなりたいものです。(一九八一・三・二十五)

と皆さん方が心中で考えておられることをイエズス・キリストの御母、聖母の汚れなきみ心におあずけしたいと思えます。みなさん方の名において私がささげる祈りに沈黙の祈りで加わってください。

「聖母よ、御身は、代々に至るまで人々は私を幸いな者と呼ぶでしょう、と聖霊に充たされておっしゃいました。私たちは、先祖たちの歌がときれぬように、御身を讃えてもう一度歌います。人類が神に捧げた最も輝かしいもの、完全な人間、正義と聖性において新しく創られたもの、『汚れなきお方』『聖寵に充ちたお方』と呼んでいる類なき美。」

「母よ、御身は『新しいエワ』でいらっしやいます。御子の教会は、『新たな人間』を着

てのみ福音を述べ伝えることができる。すなわち、よきおとずれを世にもたらし、『新たな人類』を作ることができると知っています。すなわち、御身の取りつきによって、聖性とみよりの種子である福音のおとずれが教会に決して欠けることのないように御身にお願いたします。

「聖母よ、御身に輝く特典のゆえに御父を礼拝します。また、御身が私たちのために『主のはしため』とるに足りぬ人間となつてくださったゆえに御父を礼拝します。御身は『なれかし』とおっしゃったので、聖霊の花嫁、御子の母となられたからです。」

「母よ、御身は福音書に現われて、キリストを牧者や東の国の王たちにおしめしになりましたから、司教、司祭、修道者、父母、青少年など、福音の伝え手がキリストのものとなつて人々に福音を述べることができるようにしてください。」

「聖母よ、御身は、御子が神の王国の誕生を示す奇跡の行なわれるときには群衆の影に

説教・講話・書簡等の抄記

深い理解を示すことができるように、司牧者をお助けください。」

「母よ、御身のとりつきによって、大広間に集まった弟子たちのように、教会に聖霊が絶えず臨み、私たちがそれを素直に受けいれることができるように、神の真理を求めらる人々、真理に仕え真理を實行すべき人々をお助けください。キリストが常に『世の光』であるように、そして、み言葉にとどまり、自由にする真理(ヨハネ8・32参照)を私たちが知っているがゆえに、世が私たちが主の弟子と考えることができるようにお助けください。」一九八〇・六八

神の御母

(多くの)教会につけられた「神の御母」という名は、教皇パウロ六世の使徒的勸告『マリリス・クルトゥス』に示されたマリヤ信心をますます深めるのに役立つことでしよう。ほんとうのマリア信心があれば、マリヤの模範にならって、日々三位一体の奥義を深めることができるはずで、マリヤはお告げのとき、愛深い御父のみ旨を「なれかし」の

定期的な告解は 聖性への道

一九八一年一月三十日、教皇様は内教院(いわば神と信者の良心との関係のみだれを調整するための法廷)およびローマの大聖堂つき聴罪師に対してお話しになった。

(教会は特別な規定を定めました)が、これによって、告解が特別に大切な秘跡であること、なかでも普通の告解の仕方、つまり秘密の告解の尊さをはっきりと示しているのです。私は今も、去年の聖金曜日、聖ペトロ大聖堂へ行き、みなさんが教会で果しておられるつましい、しかし尊く大切な聖務を果せたとき、あの喜びと感動を忘れることはできません。内教院聴罪司祭と世界中のすべての司祭方に伝えたいのです。どんな犠牲を払ってでも、ゆるしの秘跡をさずける仕事に没頭してください。そして、この秘跡によればキリスト信者の良心が正しく形成されることを確信して欲しいと思います。どんな人間的方法よりも、どんな心理学的方法、教育的社会学的方法を使うよりもずっと正しい良心の形成に役立つのです。ゆるしの秘跡には、実際に、慈悲に

富む神が働いていらつしやるのです。それから、大罪を犯した時は完全な告解(つまり、大罪の種類と数その他を言いあらわすこと)が必要である、というトリエント公会議の教えがいまも有効であり、これからもうずっとそのうであることを忘れないでください。聖パウロ、それにトリエント公会議のきまりは現在も将来もつねに守らなければなりません。それによると、大罪があれば、ご聖体を受ける前に告白しなければならぬのです。このような教えや勧めをくり返し想起したからと言って、最近教会が、一般赦免をより広い範囲に使えるようにしたことを無視するわけではありません。重大な司牧上の理由があれば、必ず守るべき明確な規定を守って、大勢の人々に最善の恩恵がより簡単に与えられるように、一般赦免の枠が広げられたわけ

ことばで完全にお受けになりまし。自分を母にさせるという驚くべきみわざの主、聖霊をマリヤは信じました。人々を救うために、人となられた「神のみことば」をながめていました。生命と光と愛のみなもとである三位一体の神が結ばれた新約を、最初に信じたのはマリヤでありました。父と子と聖霊のみ名によって洗礼をうけた私たちに、神のまことのみ顔をみつめる力をくださるよう聖母にお願ひしましょう。そうならばマリヤと共に教会をもっと愛す

です。しかし、それができるための条件を細かなところまで守らなければならぬことを忘れないでいただきたいのです。大罪のある場合は、一般赦免を受けた後でも、秘跡としての罪の告白をしなければなりません。またどんな時でも信者には、個人的な告解をする権利があることをはっきりさせておきたいと思ひます。これに関連して強調したいのは、人から奪うことのできない個人的な権利が奪われないように現代社会は嫉妬深いと言えらるほど注意して見つめていくことです。人間のことも神秘的で神聖な神との出会いのこの領域で、聖職者を通して実現する個人的で比類のない、神との語り合いを否定することなどできるでしょうか。神のみ前に貴重な存在である信者から、恩恵の素晴らしい実りである非常に深いよるこびを奪うことなどできるでしょうか。

徳の実行

ゆるしの秘跡についてもう少しつけ加えたいと思ひます。この秘跡にあずかることよって、謙遜と誠実を實行し、教会の仲介に対する信仰を宣言し、神への希望をあらわし、注意深い良心の糾明をすることになります。

ることができよう。「聖母がナザレトやエリザベットの家やカナヤゴルゴタにおいて示した活動的な愛は、(…)すべての人々が真理を知るようになることにおいて、また恵まれない環境にいる人々や貧しく弱りはてた人々に対して寄せられている教会の関心において、さらにまた、キリストの死によってもたらされた救いにすべての人々を確実にあずからせようとする彼女の努力において、平和と社会的な調和に対するマリヤの絶えざる献身において、示されています。『マリリス・クルトゥス』28井上訳より(一九八〇・五・四)

ですからこの秘跡はただ罪を破壊するという否定的な面をもつだけでなく、徳の實行をうながすばらしい面をもっているのです。徳を實行すること自体、罪の償いであり、かけがえない霊性の修練所であり、満ち満ちるキリストの背丈にまで至る完全な人間をつくるため(エフェゾ4・13)に役立つ、非常に積極的な、靈魂の生まれかわりへの道なのです。この意味で告解はそれ自体が高度な霊的指導と言えます。

それゆえ、ゆるしの秘跡を大罪のあるときだけ利用するものと考えてはならないのです。教義的な面はさておき、定期的にする告解、いわゆる信心の告解が教会において聖性に達するための道であったことを思い出して下さい。最後に、告解の使徒職はそれだけでもう報われているというのを、聴罪師、司祭のみならず共に思い出しておきたいと思ひます。人々のために神の恩恵を取り戻したという事実は、司祭を言葉に尽くせないほどの喜びで満たしてくれま。主が、司祭の地上最後の日に生命への道を開いてくださるだろうという、ほんとうに謙遜な希望をもつように勇気づけてくれるのです。「あなたは、行って、休みにはいれ。そして、日々のおわりに、あなたの分け前をうけに起きあがるだろう。」(ダニエル12・13)

不変の教え

教会の御母

教皇さまは、聖マリアの連禱に「教会の御母」を加えられました。

教会の前表であり模範である聖マリア

(一)教会は、「神の御母にならない、聖霊の恩恵によって無傷の信仰、かたい希望、まことの愛を保っています」(教会憲章64)

その教会の前表は、パトモスの預言者が見て、黙示録に書いた婦人です。ずっと昔から人々は十二の星を冠に戴いたこの婦人をイエズスの御母聖マリアであると信じてきました。それはそれとして聖アンブロジウスが思い起させ、また教会憲章に言われているように、聖マリアは教会の前表なのです。

愛すべきみなさん、たしかに神の御母マリアこそ教会にとっては模範であり、あがなわれた人々にとっては母なのです。示された神のみ旨をすぐに、しかも無条件で受け容れることによって救い主の母となり、全く特別な方法で、救いの歴史そのものに介入しました。御子の功徳によって、原罪の汚れなく生まれるだけでなく、全ての罪を免れ、恩寵に満ちておられたのです。

多くの人々が神を求めていると思われるとき、しかし同時に、時には露のように人の目にとまらずに、またある時には、多くの人々をひきずり込む世俗主義が旋風のように吹き荒れるとき、私たちは教会建設のために召し出されているのです。

救いの協力者

罪によって神は人類の歴史や個人の歴史の中心ではなくなくなってしまいます。「神のようになるだろう」(創世記)という最初の誘惑、

ついで原罪が犯されたあと、人間は神から離れ、ジレンマにおちいりました。御父よりの愛か、「御父からのものでないこの世の愛」かの、いずれかを選ばなければならなくなったのです。さらに、もっとひどいことに、人間は自分自身にとって遠い存在となり、「神の死」を選んで、結局は「自分の死」を招いてしまったのです。

聖母マリアは主の召使であることを認め、「なれかし」と言って「心と胎内」(聖アウグスティヌス)に救い主キリストの奥義を受け容れました。しかし神のみ手にすべてを任せたいという受身的な道具としてではなく、自由な信仰と完べきな従順で人類の救いのみわざに協力されたのです。神と人類の間のただ一人の仲介者であられるイエズス・キリストの御働きをへらしたり、あるいはなにかをつけ加えたりすることなく、マリアは救いの道を示してくださいます。御子キリストとその救いのみわざに向う道をお教えになるのです。

福音宣教の星

第二ヴァチカン公会議で正確に宣言されたようにマリアは我々をキリストに導きます。「人々に対するマリアの役割は、キリストのこの唯一の仲介を決して曇らせたり、減少させたりするものではなく、かえってキリストの仲介の力を示すものである。(…)キリストと信者との直接の一致を妨げるどころかそれを助けるのである」(教会憲章60) 教会の御母である聖なる乙女は教会の生命と働きに特異な仕方で紹介されます。それゆ

え教会は、処女でありながら、聖霊の働きによって、神の御子「みことば」を世にもたらしたマリアに目を向けるのです。「教会の使命は福音宣教によって信者の心に聖霊のみわざになるキリストが生まれるようにすること」(教会憲章)です。かくして、教皇パウロ六世が「福音宣教の星」と名づけたマリアは、福音宣教の道を明るく照してくださいます。救い主キリストの告示と救いの使信は、単なる人間的福祉と地上的幸福ではありません。たしかに共同の、あるいは個人としての人間の歴史との関連を持っていますが、根本的には、キリストにおいて、神との交わりを実現させるための、罪からの解放を告げ知らせることなのです。ところで、この神との交わりは人間相互の交わりを排除するものではありません。というのも、救い主であり、一致の源であるキリストに回心する者は、万人にとって、救いをもたらす一致の見える秘跡、つまり教会を形成すべく、招き集められているからです。

行ないと信仰の規範であるマリア信心

そこで、古くからの伝統を守り、全てのキリスト教共同体の構成員への尊敬と愛を保ち、信徳、望徳、愛徳を強く必要とする私たち現代におけるキリストの弟子は聖マリアとの一致を望みます。人類の歴史上重大なこの時期にいる私たちキリストの弟子は、連続と続く伝承と教会の不断の思いに心から一致し、信望、愛徳が心に命じるところに従って、マリアと一つになりたいと望んでいます。そして、その望みは、いつの時代にも教会が示して来たマリア信心の業を通して実現させたいと思ふのです。

マリアに対する愛と信心は(…)人々の信仰心の特長です。私は、教会の司牧者がこの特質ある一面を尊重し、その信仰心の最もふさわしいあらわし方のできるよう奨励し、助けてくださいることを信じております。その結果、

「マリアを通してキリストへ」というモットーを実現させることができるのです。そのためには、神の御母への信心には本質的と言え根拠があり、また無数の外的な表現によって表わされることを知っておく必要があります。本質的なものは恒久的で変わることなく、キリスト教の礼拝の本物の要素でありつづけるのです。それらが正しく理解され実践されるなら、パウロ六世教皇が説明されたように教会において「それは行ないの規範の証しとなり、それが心ななかで自分の信仰の規範を生き生きとさせようという招きのすばらしい証し」であるのです。外面的形式は必然的に時の流れに拘束されていますから、パウロ六世教皇が表明されたように、実践されていることを伝承を充分尊重しつつ、更新し現実化しなければなりません。(一九八〇・四・七)

「教皇様の声」専用保存ファイル増刷入荷!



品切れのために、しばらくの間ご迷惑をおかけしてました「教皇様の声」専用保存ファイルが入荷いたしました。御希望の方は、下記へお申込みください。

定価 500円 (送料無料)

ポリプロピレン樹脂製 金文字装丁 「教皇様の声」3年分が保存できます。

(財)精道教育促進協会

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 072393